



【住 所】岩手県盛岡市上田1-4-1

【病院長】佐々木 崇 先生

【病床数】685床

【スタッフ】医師4名、看護師10名(救急と兼務)、洗浄担当2名、クラーク2名

【内視鏡検査・治療総数】(平成21年度)上部消化管内視鏡検査 4,966件、下部消化管内視鏡検査 3,286 件、ERCP 327件、ESD 54件、内視鏡的止血術 189件、EIS 29件、胃瘻造設 77件

【保有機器】上部用内視鏡12本、下部用内視鏡8本、十二指腸用内視鏡4本、高解像度ハイビジョン内視鏡システム6台、NBI4台、上部用拡大内視鏡2本、下部用拡大内視鏡1本、経鼻内視鏡4本、上部用超音波内視鏡3本、ダブルバリエーション小腸鏡1本

県全域をカバーする急性期高機能病院として 地域の医療支援と人材育成を担う

県内最後の医療の砦として 高度先進医療を24時間体制で提供

岩手県立中央病院は、四国四県に相当する広大な面積を有する岩手県において、急性期高機能センター病院として県全域を対象とした先進・高度・特殊医療機能を提供し、現在25ある県立病院の中核機関としての役割を担っています。深刻な医師不足を抱える地域医療を支援するため、各県立病院に対する診療応援にも積極的に取り組んでおり、その数は平成21年の実績で1,100件を超えています。

内視鏡室においても、「県内の患者様が首都圏と変わらない治療を受けられること、高度な治療を県内で完結できること」を常に念頭において日々の診療にあたっています。内視鏡科科長で地域医療支援部長も兼務されている村上晶彦先生は、「設備や人材の不足を理由に十分な治療を受けられなかった患者様にとって、当院は県内最後の砦と言えます。それだけに我々の施設が持つ責任は重大であり、日々の研鑽を怠らず最新の医療知識や技術を習得する必要があります」とおっしゃいました。そのため村上先生は、医師主導の臨床試験や学会活動に積極的に参画し、他の医療機関とのコミュニケーションを緊密にするよう努め、EUS-FNAや早期胃癌に対するESDなどの高度なテクニックをいち早く習得して患者様へ提供しております。

同院は県民の安心の拠り所でもある救急医療に特に力を入れており、救急車を断らない「24時間医療体制」を実践しています。平成21年の実績では、救急車受け入れが4,000件を超えました。そのため、内視鏡室でも24時間体制で緊急内視鏡を行っており、年間145

例にのぼる症例数は内視鏡施行数全体の約1割を占めています。村上先生は、「当院では救急部と内視鏡室の看護師が兼務で緊急内視鏡に対応しています。内視鏡処置を熟知したスタッフが救急の場に控えていることは、医師にとっても心強く安心して手技に集中できます」とお話になりました。



内視鏡科科長
村上 晶彦 先生

外科との良好なコミュニケーションによって生まれる 患者本位でレベルの高い胆膵内視鏡診療

内視鏡室の大きな特色として、全国でも高い水準を誇る胆膵領域での内視鏡治療が挙げられます。総胆管結石に対する内視鏡的載石術は累計で800件を超え、うち96%の患者様で内視鏡的な排石が可能でした。村上先生は、「当院は外科が肝胆膵領域の悪性腫瘍手術に積極的に取り組んでいることもあり、県内の他施設から難しい症例が集まってくる傾向にあります。中でも、胆管ステント留置の困難例を紹介されるケースが増えています」とお話にあり、さらに「当院は内科と外科のコミュニケーションが非常に緊密であり、それぞれの立場から意見を出し合って患者様の治療方法を策定しています」とご説明いただきました。こうしたきめ細かいサービスが、患者様や地域の他施設との信頼関係を構築し、紹介患者数の増加につながっていることが伺えました。

● 若手が新人を指導するユニークな教育制度がお互いの成長を最大限に引き出す

地域の拠点病院として、同院では将来の医療を担う優秀な人材を育成することにも力を入れています。まず、研修医は上述の応援診療で他の県立病院へ派遣され、そこで消化器科に限らず総合内科全般の診療に携わります。同院で研修医1年目の小幡紘先生は、「院内の臨床研修では消化器科の医師として専門的な教育を受けていますが、他院での診療ではより広範な領域をカバーする総合内科医としての役割を求められます。このような診療に携わることは、疾患の相関関係や背景を理解する良い機会となります」とご説明されました。また、同院では2年目以降の研修医が後輩研修医を指導する、ユニークな「屋根瓦方式」と呼ばれる教育制度を採用しています。これは、教育を受ける側としても自分と近い視点での指導は分かりやすく質問などもしやすく、また指導者側も自分が得た知識を整理し、分かりやすく解釈するとい



消化器内科 レジデント
小幡 紘 先生

う過程を経るため、他者を指導する責任感から受動的な研修期間と比べてはるかに速やかに知識と技術の習得が得られるという、双方にとってメリットを生む制度として好評のようです。



内視鏡室のようす

● 役割分担を明確にした優れたチーム医療が「Patient Safety」を実現する

年々増加しさらに高度化する内視鏡診療を行う上で、内視鏡室では医師とスタッフのコミュニケーションを円滑にしたチーム医療を追求しこれに対応しています。内視鏡室の看護師で内視鏡技師の資格も有する石川優子さんは、「近隣施設と比較しても症例数が非常に多く、また最先端の内視鏡治療を行っているのです。私たちスタッフもそれを自覚し、責任を持って業務にあたっています。検査前には抗凝固剤の内服をチェックし、生検による出血がないようスタッフがきちんと確認して検査を開始しています。先生方にはなるべくストレス無く目の前の手技に集中していただくため、それぞれの個性を理解しそのニーズに迅速に対応することが私達の役割だと思っています」とお話になりました。



内視鏡室看護師・内視鏡技師
石川 優子 さん

患者様に安心して検査や治療を受けていただくため、内視鏡室では1検査1患者ごとにスコープを機械洗浄し安全性には最大限に配慮しています。また、3年前からディスポーザブル製品の再生を禁止し、単回使用とすることを徹底しました。村上先生は、「緊急内視鏡が多いことから、使用回数に左右されない、常に一定のパフォーマンスを期待できるディスポーザブル製品は、今や日々の診療で不可欠のものとなっています」とお話になりました。「Patient Safety」をモットーに、患者様に安全で最高の医療サービスを提供すべく、チーム一丸となって高いモチベーションで日々の診療にあたられている姿が印象的でした。



内視鏡室のみなさん